

11・10天皇50年祭を爆砕せよ！

総蜂起路線の真価を賭け、 天皇制排外主義攻撃粉碎へ 全国から総力決起せよ

全国の同志諸君！ 友人諸君！ 今まさに我々は二年有余の党建設と革命的政治闘争の全成果をためらうことなく、全力をもって、打ち出すときをむかえている。11・10天皇在位五〇年式典の爆砕、これである。

今秋期、革命党と革命のプロレタリア人民が、社帝派、社会排外主義潮流との断乎たる党派闘争を組織しつつ、全組織力量を傾注し、全国の革命的労働者人民の反帝・プロ独戦取に向けた全エネルギーを集中し、死力を尽して闘いとならねばならない最大の課題こそ、それである。

9・1をもつて開始された今秋期の闘いに對し、党建設と階級形成戦とを一個二重の任務として貫徹し、全国政治共闘をはじめとした革命的政治勢力を組織し、領導してきた我々は、三全総でもつて総蜂起路線——「帝国主義の腐朽性に抗し社会帝国主義社会排外主義と対決して世界革命の最前線へ」 帝国主義心臓部にプロレタリアートの総蜂起を——のスローガンに結実した革命的政治路線を戦取した。そして、この路線は党の戦闘陣型内において圧倒的に確認され、天皇決戦へ向けた10・21闘争、そして遊撃特別号の発行、10・31狭山決戦という一連の闘いにおいて、一步一步、組織的物質化としてかちとられているのである。と同時にこの路線への確信は党への信頼を一層強め、多くの闘う労働者人民の党への結合を強めてきている。これはこの間の党の政治活動領域が飛躍的に拡大してきていることがなによりも証明している。

だからこそ、今秋期は我々に息つく暇を与えないほどに個々の成員まで含めた組織的政治的力量的圧倒的飛躍を要求してきたのである。そしていま、こうした我々の成果が熾烈な権力闘争の質を孕んだ11・10天皇決戦において試されることになったのだ。この試練に打ちかつことなく、一歩たりとも前進はない、と同時に、この闘いにおいて自ら先陣を担い切ろうとしない者には未来のないことを、全人民の革命的戦闘的決起の圧倒的戦取をもつて知らしめねばならない。また帝国主義者をして、革命の時代の到来を知らしめよ！

11・10天皇式典を頂点とする排外主義、破防法社会攻撃の 反革命性を暴き出し、一切を決戦体制にしぼりこめ



10・21前段決起の勝利を11・10へ

帝国主義権力は、この式典を「天皇制反対」過激派」の大合唱を組織するなかで強行しようとしている。こうした権力のキャンペーンは自民党内及び議会内の「抗争対立」のボーイズの上で展開されていることは従来の構造とならなり変りはない。つまり、それは六〇年代後半以降の破防法攻撃の日常的展開——革命勢力の圧殺、それとのプロレタリアート人民からの分離、加えて既成議会主義「野党」及び労働者大衆の排外主義的組織化という二重の攻撃意図をもった反革命攻撃の一環にはかならない。これ自体、帝国主義の腐朽性を如実に示しているが、同時に帝国主義の危機が抜きさしならないところまでできていることを示しているのだ。したがって、今日の敵のこうしたキャンペーンのもつ意味をたんなるイデオロギー的位相で捉えることは決定的に誤りであり、敵を美化するに等しい。

我々はこの間、第二次ブンド的反帝戦略主義の克服を重要課題として捉え込み、党建設・階級形成戦を闘い抜いてきた。またそうした視点から皇太子派沖、天皇派阻止闘争を闘い

11・10 天皇50年式典粉碎闘争 午前10時 松町公園

遊撃

第 23 号

1976. 11. 5
毎月5日発行

定価 100円

共産主義者同盟
遊撃編集委員会

発行 遊撃社
連絡先 東京都世田谷区
千歳郵便局
私書箱 4 号

振替 東京0-195783

今号の主な内容

- ☆11・10天皇50年祭粉碎へ
- ☆10・31狭山最高裁決戦報告
- ☆10・16、21闘争報告
- ☆11・2破闘会集会報告
- ☆全金本山闘争報告
- ☆社会帝国主義批判(Ⅱ)

11・10決戦に勝利し、日帝のアジア侵略反革命と対決するプロレタリアートの戦列を更に打ち固めよ

抜いてきたが、今日の敵のキャンペーンはまさに反帝戦略主義的位相からはならん攻撃的闘いを組織しえないことを示しており、この

ことの意味をしつかりと確認しておかなくてはならない。

敵の攻撃は天皇・天皇制の存在自体を労働者階級人民に対し、強制するものとして正面からつぎつけている。このことはいいかえれば、天皇の軍隊・警察・官僚組織を認め、侵略反革命—アジア人民への日本人の公然たる敵対、在日朝鮮人、部落大衆に対する民族差別、身分差別的固定の強化、労働者階級内差別分析の強化という排外主義的組織化—を強行する攻撃として存在しているということであり、プロレタリアート人民への公然たる宣戦布告にほかならない。それをいち早く、皇太子派、天皇派米阻止闘争において暴露したのは我々であるが、今秋天皇式典こそはこの間の敵の綿密な計画化された攻撃の集大成されたものである。すなわち、皇太子派、天皇派米、そして「五〇年にわたって国民に支持されてきた。戦争は止むをえなかった」(派米後の記者会見)「在位五〇年を国民的行事として祝いたい」(三木)、「労使安定と検察、警察・裁判所、官僚組織が健全であればよい」(日経連桜田)、「内閣告示として一世一元を確定する」(総務長官西村)という一連の敵の言動こそ、それを物語っている。

義の崩壊が基本的にアジア階級闘争及び日本階級闘争の攻勢局面のうちに規定され、桜田発言が追認した如く、国家権力の独自性が代議制民主主義たる議会制から離れている

排外主義的純化を深める社共民同を踏みしだき、日帝、帝国主義労働運動派の反革命階級形成攻撃を打ち砕け!

すでに民間の、日産労組、造船重機労連などが象徴する帝国主義労働運動下では、組合大会には労組旗をはさんで、日の丸と社旗が飾られている。とすれば、「五〇年式典」の発案がこの帝国主義労働運動の議会式化である民社党からなされたというエピソードも充分納得がゆくというものだ。一方、社会党は戦後、戦前分離論で反対はするが、実は戦後民主主義を支えた「平和」「安定」「繁栄」こそ日帝が米帝によって支えられ、独占資本の育成がはかられ、かつ日帝の戦前におけるアジアにおける反革命任務を米帝に引き継ぐことによって可能となったという歴史を隠蔽し、日帝の今日の排外主義攻撃の同伴者たる位置を明確にしているというにすぎない。だからこそ、総評民同の民間労組が帝国主義労働運動への合流を急ピッチに進めていることに階級的攻撃を組織しえないのは当然であり、今日、敵の攻撃が公務員、公労協に向けられていることの政治的階級的意義をつかみえないのだ。

国家権力の軍事的支柱は軍隊・警察という暴力装置であり、官僚組織にはかならない。この官僚組織を担う公務員、公労協労働者の組み込みは敵にとって不可欠である。スト権ストに見せた敵のなみなみならぬ決意の根拠はここにある。にもかかわらず、今国会では、インフレと戦争準備、排外主義予算を公労協の仲裁々定実施とひきかえに積極的に認めたのははかならぬ社会党であり、帝国主義に買収された姿を天下に示したのである。そして、こうして獲得された賃金原資は労働者内差別分断、革命的労働者バージの資金として「有効」に使われるというわけだ。天皇の公労協への道をひた走りに走るといのが彼らの今日の姿であり、革命的労働者はこれを徹底して暴露し、攻撃の拠点形成しなければならぬ。敵の集中した攻撃がここに向けられていく以上、その任務は極めて重要である。また日教組等の公務員と同様である。各学校では日常的行事のなかでは必ず日の丸が掲げられるにいたり、これと闘っているのは「反戦」

を継承し抜いてきた限られた部分である。なかには分会が日の丸掲揚に積極的になつていくところさえある仕末なのだ。

天皇制を宗教とみたてた日「共」が敵のこうした攻撃を積極的に認めていることは多言を要しない。彼らの住民奉仕論や聖職論こそがまさにそれである。天皇制ともつとも徹底して闘った日共が天皇の政党となつたというこの歴史のパラドックスはすでに特別号が、二七テーゼ、三二テーゼ批判で明らかにしたように、その経済主義にあり、天皇制国家権力の独自の性格、下部構造から相対的に自立した位置を見抜けなかったことにあり、米帝解放軍規定—二段階戦略(米帝従属論)の戦後の彼らもこれを抜けることはできずにきたこともその結果でしかない。だから日帝が米帝とも亀裂を深めつつ、排外主義攻撃の強化へ向えば向うほど社会党以上に敵の政策を路線化し、社帝派的純化を行なうことになるのだ。したがって、革命派にとって彼らとの党派闘争は必然的に非妥協的となるのは当然であらう。

こうした帝国主義者の攻撃は、インドシナ三国人民の革命的闘争の勝利によって最後の確認された戦後帝国主義世界体制の崩壊とさらに打ち続く人民解放闘争の波、朝鮮を筆頭とするアジア階級闘争の激化に迫いつめられた日帝の危機の表現であることはこの間我々がくり返し明らかにしたところである。そして、今日の天皇攻撃こそ、日帝のプロレタリア人民に対する攻撃の中心軸であること、文字通り、反革命階級形成の中心的軸としての組織的大衆動員構造の確立としてなされようとしているのである。いいかえれば、帝国主義の危機の反革命的突破、これである。

今日、敵の攻撃が公務員、公労協に向けられていることの政治的階級的意義をつかみえないのだ。

国家権力の軍事的支柱は軍隊・警察という暴力装置であり、官僚組織にはかならない。この官僚組織を担う公務員、公労協労働者の組み込みは敵にとって不可欠である。スト権ストに見せた敵のなみなみならぬ決意の根拠はここにある。にもかかわらず、今国会では、インフレと戦争準備、排外主義予算を公労協の仲裁々定実施とひきかえに積極的に認めたのははかならぬ社会党であり、帝国主義に買収された姿を天下に示したのである。そして、こうして獲得された賃金原資は労働者内差別分断、革命的労働者バージの資金として「有効」に使われるというわけだ。天皇の公労協への道をひた走りに走るといのが彼らの今日の姿であり、革命的労働者はこれを徹底して暴露し、攻撃の拠点形成しなければならぬ。敵の集中した攻撃がここに向けられていく以上、その任務は極めて重要である。また日教組等の公務員と同様である。各学校では日常的行事のなかでは必ず日の丸が掲げられるにいたり、これと闘っているのは「反戦」

今日、敵の攻撃が公務員、公労協に向けられていることの政治的階級的意義をつかみえないのだ。

国家権力の軍事的支柱は軍隊・警察という暴力装置であり、官僚組織にはかならない。この官僚組織を担う公務員、公労協労働者の組み込みは敵にとって不可欠である。スト権ストに見せた敵のなみなみならぬ決意の根拠はここにある。にもかかわらず、今国会では、インフレと戦争準備、排外主義予算を公労協の仲裁々定実施とひきかえに積極的に認めたのははかならぬ社会党であり、帝国主義に買収された姿を天下に示したのである。そして、こうして獲得された賃金原資は労働者内差別分断、革命的労働者バージの資金として「有効」に使われるというわけだ。天皇の公労協への道をひた走りに走るといのが彼らの今日の姿であり、革命的労働者はこれを徹底して暴露し、攻撃の拠点形成しなければならぬ。敵の集中した攻撃がここに向けられていく以上、その任務は極めて重要である。また日教組等の公務員と同様である。各学校では日常的行事のなかでは必ず日の丸が掲げられるにいたり、これと闘っているのは「反戦」

上「したのだといえる。それは、戦後民主主義

上「したのだといえる。それは、戦後民主主義

上「したのだといえる。それは、戦後民主主義

今日の階級闘争は今春闘が示したように、原則的、階級的労働運動を展開している部分に対し、公安の動員のもとに弾圧がかけられていることよって明らかである。突出した戦闘行動に対してではなく、階級協調を破壊したというただその点において攻撃がかけられてきていることをみれば明らかである。しかも、全金本山、教育社の闘争が示したように、住友重機追浜での闘争が示したように、権力・資本は単に「過激派」つぶしだけがねらいではない。原則的階級的労働運動の積極的解体に積極的労働者を組織動員し、生産性向上、合理化を促進し、利潤獲得の尖兵へと労働者総体を組織していくことにあるのだ。事実、本山でも、教育社でも争議過程にもかかわらず、大幅な企業収益を計上している。こうした資本との妥協をかさねつつ、闘う労働者の孤立、あけくは権力へ売り渡す社「共」・総評民同の階級性格は明らかだろ

う。加えて一本山闘争が示した如く、総評民同の団結の質のうちに左翼反対の位相でのヘゲモニーを狙って「別棟」を主張した部分はどうした既成への迎合以外のなものでもなく、すでに彼らが思想的には排外主義へ屈服していることをはつきりと示したのだ。だが社「共」・総評民同、そしてこれに屈服するこれらの部分はなおかつ今後ともわが党をはじめとした革命的プロレタリアート人民の激

しい攻撃を覚悟しなければならないことは知っておかねばならないだろう。以上みてきたように、天皇攻撃は、先行的には全社会的規模で、すなわち、破防法攻撃と併せて個別資本内部における階級協調攻撃との統一展開のなかですでに熾烈に進められており、こうした攻撃の集中、集約したものととして、天皇制国家権力の確立、民族排外主義・侵略反革命体制の形成へと組織的に大衆動員構造をうちたてる反革命階級形成攻撃としてあるのだ。

それ故、我々の任務は不断に労働者階級人民を指導階級へと高め上げてゆくところの闘いとして、こうした敵の革命的階級形成戦に打ちかかっていく革命的階級闘争の組織化を個別資本内における党的戦闘陣型の形成の貫徹をも通しつつ、全社会的規模においても果していくこととなければならないし、在日朝鮮人、部落大衆との革命的団結をより一段と強めあげていくことにある。

だがそのためには、社「共」と対立する従来からの左翼戦線内での党派闘争を断乎としておし進めるのでなければならぬ。今次天皇決戦の準備過程で推し進めてきている党派闘争をより拡大し、深めることがなしに天皇決戦における革命的階級闘争は量的にも質的にも飛躍した地平で獲得することはできない。

社帝派・社会排外主義の革命派への敵対を粉碎し 天皇制排外主義攻撃、右翼民間反革命との激闘に 勝利せよ

帝国主義の危機は階級対立の非和解性故の諸階級諸階層の政治的分解と再編を急速に促している。支配階級内の分裂はいうにおよばず、既成「プロレタリア」諸政党の階級基礎をも暴露しはじめている。革命党建設の未熟性を孕んだ階級闘争の発展段階に規定された党派的政治関係の転位として従来左派であったものが中間派へ転落し、中間派は社会排外主義・社帝派へと転落を開始している。これは、わが党と党の戦闘陣型がプロレタリアートの独自性に立脚し、全国政治共闘をはじめとする革命的階級闘争を全国的に形成してきたことよって基本的にもたらされた分解であり、これをより一層促進し、わが党を基軸とした革命的再編へと推し進めなければならぬ。諸階級諸階層の分解は人民内部にプロレタリアートの独自利害を一貫して主張する党を要求すると同時に、既成の「プロレタリア」政党の変質を強制する。帝国主義の危機は諸階級諸階層に現状の変革を要求するからである。それはこの間の闘いに見られる何く、反帝戦略主義の限界をもつていたとはいえず、第二次ブンドの組織された革命的暴力に対する疎外の批判の位相で結合していたノンセクトの消滅の進行が明らかになっているところだ。大衆暴力闘争が階級支配に対する闘いという

意識性を孕みつつも、未分化のままに敗北を契したことに對し、近代への叛乱の位相に押しとどめてきたノンセクトが、今日むきだしの利害の衝突という明確な階級基礎をもった党派闘争の前に分解するのは必然であろう。こうした中で、四トロの社会排外主義への転落は決定的なところまできた。天皇決戦はそうした重大な分岐をもたらしつつあるのだ。彼らは「社会主義革命をすれば当然、憲法も変わる。だから天皇式典(天皇制)を自己目的化して闘うことは労働者階級の任務ではない」というのである。それは「戦後民主主義が象徴天皇制を同化してきたからである。」

彼らにとって今日の階級攻防は反動との闘いに一般化され、戦後民主主義の崩壊ではなく、その危機を確認し、救済のヘゲモニーとして「社共人民政府」を主張しているにすぎない。したがって、美濃部が「戦後はともかく、戦前まで含めて視えない」といった位相以上でも以下でもないわけだ。戦後の天皇制が、そして民主主義がアジア侵略反革命戦争のもとのアジア人民の血のうえに築かれてきたことへの一片の想いをはせない彼らの部落大衆、在日朝鮮人民との共同の闘争に対する姿勢は明らかだ。融和主義であり、もつとも悪しき先進国プロレタリア主義であつてプロレタリアを指導階級へと高める闘いを一切放棄し、プロレタリアへの武装解除を呼びかける以外のなものでもない。もはや彼らは、排外主義に組織された本工労働者層の即自性に屈服し、かつそれに基礎をおく墮落した「プロレタリア」政党でしかないのは明らかである。また機関誌等で差別的言辞を何のためらいもなく吐く革マルは日「共」と同列の社帝派であり、帝国主義に買収された労働者上層の自然発生性に拝跪し、民同等労働貴族に迎合する既成労働運動を基礎に、戦闘的プロレタリア人民の血の海に築かれた反革命排外主義政党である。だから、天皇攻撃の闘いに對し、「アナクロニズム、中年のノスタルジア」と罵倒し、敵対するのだ。また一方、中核派はこの革マル対決において、一定の評価を与えられるべきだが、レーニン戦術思想を正しく階級形成戦へと物質化し、これら社帝派の基礎としての民同労働運動の革命的解体を、共産主義と労働運動の結合の路線のもとに貫徹しきれないという限界をも暴露しており、第二次ブンドの戦術思想・反帝戦略主義と革マル的組織論の混合という政治組織思想的中間主義に陥っている。そのことはまた、天皇攻撃に対する立場においても明らかである。すなわち、レーニンの帝国主義と民権問題の復権という正しい問題意識をもちつつもプロレタリアートの独自性に立脚した資本主義批判を基礎とした帝国主義批判の貫徹をなしきれないため、七・七華青闘の告発を受けとめつつも、それを道徳的レベルでの血債論という戦後民主主義義観、国民責任論的位相以上をだしきれず、天皇批判もそのレベルにとどまっている。これは「天皇制ボナパルト」が帝国主義権力の独自の性格を見抜けないという致命的欠陥を持つているが故の限界であるとともに、分析視点がレーニン帝国主義論の宇野経左派の改作の機械的アテハメからくる限界なのである。それは彼らがベトナム革命闘争に對して、帝・スタ代理戦争論から「特殊部分的侵略戦争」という手直しをしたものの、帝国主義者の側からしか問題をたてられていないというのを見て明らかである。問題は農民に對するプロレタリアートの指導による社会主義建設という視点から植民地従属国民人民の闘争との連帯が語られなければならないということだ。(詳細は特別号参照)以上の点から、彼らは現在、中間主義的位置に存在しているといえる。

このように、帝国主義の危機は各「プロレタリア」諸政党に階級基礎を問うなかでその分解、再編を進行させるのである。このなかで我々は階級対立の非和解性に根拠をおく党として、プロレタリアートの独自性に立脚し、プロレタリア人民を指導階級に高め上げていく階級形成戦を、こうした社帝派、社会排外主義派、中間主義派に對し、資本主義批判に基礎づけられた帝国主義批判の貫徹のうちに批判し、党派闘争として闘い抜いていかねば

ならないのである。

また、これと併せて我々は天皇制国家権力と結合し、反革命階級形成の基軸を担う民間右翼の、この天皇翼賛の組織動員に対し、最大限の注意を払っておかなければならない。すでに街頭には生長の家等の「泰祝在位五〇年」のステッカーがはられ、当日にはこれら新興宗教右翼の靖国神社等への大衆動員が計画され、同時に全国各地では爆竹行列が計画されているなど、昨年九・三〇にはみられなかった右翼の大衆動員がかけられている。これらは伝統的に民族主義イデオロギーで武装されていると同時に、帝国主義侵略反革命体制の確立に向けた排外主義攻撃と結合し、同時に天皇制国家権力を実体的組織的に支える民族排外主義集団の最も先鋭な部隊への転化過程を歩みはじめている。原理研（勝共連合）はその典型的団体である。そしてこれと結びついた右翼笹川の海外青年協力隊が東南アジア、中南米に派遣され、事実上の日帝の工作員としての役割を担っていることはすでに広く知れわたっているところだ。

こうした右翼は戦前において同様、天皇

プロレタリアートの総力戦で11・10天皇決戦の大爆発をかちとれ！

世界帝国主義経済は、ベトナム革命闘争の勝利によって戦後体制崩壊を決定づけられ、いまや、植民地再編をなしきれぬまま、縮小均衡体制の持続的維持延命を余儀なくされている。米帝によるベトナム侵略戦争は米帝自身の過剰生産力の処理と一方ではドルのたれ流しによって世界経済の拡大基調を保証してきた。だがそれは、米帝の国際収支の大幅赤字、金流出をもたらし、基軸通貨たる位置を決定的に失墜させることになった。これをニクソンは確認し、米帝をして金兌換の停止、輸入課徴金制の採用等の国防衛策へと向いここに世界経済は縮小化にはいったのである。そして米帝は財政支出（インフレ政策）と同時に、巻き返し策として国際石油資本主導による石油価格の大幅上昇等を採用し、ドルと金の流入を産油国をも動員しつつ実現し、国際収支の改善、世界経済における主導権の回復、国内経済の浮揚へと向かったのである。だが石油資源を持たない日帝及びヨーロッパ帝国主義国は、自国工業製品価格の上昇をもつてしかこれに対応しえず、西独を除いて、国際収支改善にはドルであるオイルマネーの流入を招かざるを得なくなったのである。このことは一層インフレを増長せずにはおかなかったのである。また、これは非産油国である後進国には決定的ダメージをもたらしたの

は当然である。後進国は軒なみ外貨を失ない、経済の疲弊化は一段と強まったのである。その制国家権力に密着し、国家財政と独占資本に寄生しつつ、民間反革命大衆動員の組織部隊たる役割を果たさんかための、革命党及び革命的労働者に敵対する暴力部隊となつてきている。労働運動の現場で、そして街頭においても彼らは、警察権力の補完的役割をすでに六〇年代後半の大衆叛乱時に垣間みせており、今後、より公然化してくることは最近の渋谷駅頭などでの彼らの挑発行動をみれば十分だろう。逆にこのことは天皇制国家権力の実体を事実をもつて証明しており、これとの自衛武装闘争を組織的に準備することなくして、革命的政治闘争の展開と発展は保証されないということである。

まさに反革命階級形成はこのようにありとあらゆる戦線・戦場において組織的に展開されてきているのだ。これに打ちかかっていく党建設・階級形成なくして、帝国主義の軍事的支柱、社会的支柱を爆砕するプロレタリアートの総蜂起—政治権力の奪取、プロ独、社会主義の勝利はない。しかも、その展望は現下の帝国主義の危機にあつて、極めて確信あるものとなっているのである。

して帝国主義諸国は産油国への武器をも含めた輸出拡大と米帝の景気回復へ支えられつつも、後進国経済の疲弊の下で、過剰生産力を蓄積し、過剰資本の輸出市場を大幅に狭めたのである。それはなによりも、戦後反革命秩序としての新植民地主義体制の解体が進行し、なおも民族解放闘争のなかで再編しえないでいる事の証左にはかならない。こうしたなかで、三〇年代のような為替ダンピング—プロック経済化をとれない現在、変動相場制による縮小均衡体制をとらざるをえないのである。

ところで、日帝は、ドルインフレに依存しつつ、「韓国」、東南アジア、中南米等への資本輸出をはかり、これを商品輸出のテコに利用しつつ、拡大再生産及び資本蓄積を実現し、世界経済の拡大基調を支えてきた。しかし、それは同時に国内インフレの増長以外のなにものでもなく、国際的生産力水準の平準化作用を受けつつ、輸出の停滞—過剰生産力の蓄積をもたらし、それはベトナム革命闘争をめぐるアジア情勢の革命的激動による資本輸出の後退という要因とも重なった点を抜きには語れない。ここに公共投資主導、つまり財政インフレによる過剰生産力の吸収を通しての景気回復にはいらざるをえなかったのである。だがそれは異常な投機と物価上昇をもたらし、国際競争力を弱めるとともに、労使協調を保証する賃金上昇を招かざるを得なかった。加えて、アラブにおける革命闘争の

進展によって、支配基盤をおびやかされたサウジアラビア等の王制権力が近代化と軍事化をもつて革命勢力を圧殺するためとまき返しを図る米帝との利害の一致をもつてなされた世界反革命新秩序形成の一環であった。石油危機は、インフレを一層加速した。そして、これによる世界経済の縮小化のなかで、独占利潤の著しい低下をもたらした、再び物価上昇を呼び起すのである。

そして今日、インフレと賃金抑制によつて輸入を抑えつつ、先進国市場への商品ダンピング攻勢を必然化させているのである。しかし、これは、縮小均衡体制の攪乱以外のなにものでもなく、帝国主義列強からの反撃—為替レートの変更に商品輸出の規制—に直面しているのである。だがしかし、こうして蓄積される過剰資本は強制借款という形であれ、後進国へと向かわざるをえない。日帝は「韓国」では60%、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシアなどでは30%に達する資本輸出を占めており、これはいまや米帝を抜いて第一位である。まさにこれら各国はすでに日帝との緊密な経済的関係を持つており、この収益の維持は決定的比重をもっている。

世界経済を再び拡大基調へ向かわしめうるかどうかは、ひとえに帝国主義国家の市場を相互に開放しつつ全世界的な植民地再編をなしうるかどうかにかかっている以上、アジアにおける日帝の役割はまさにそれをなしとげることである。それは、タイ軍事クーデターが示したとおりである。軍事政権が先進国投資を歓迎するという言明は、このクーデターが日米両帝国主義の積極的支持のもとになされたという性格を鮮明に暴露しているのである。インドシナ三国を除く東南アジア諸国が、軒並み軍事独裁国家となつていくことはまさにベトナム以後のアジア反革命新秩序形成にとつてそれが不可欠であるからだ。それは同時に、日帝にとつての市場問題である。日帝のねらいは東南アジア諸国における食糧、原材料資源の安定的確保であり、資本輸出はほとんどそれに関連して、それ以外は現地の低廉な労働力を使った組立工場であり、世界市場への前線基地的役割を担わされている。これを支えるのが、農村大地主と買弁ブルジョアジーを基礎とした軍事官僚との結合であり、これは土地革命を中心とする民族解放—社会主義革命闘争の激化を不可避としている。

また「韓国」はこれら東南アジア侵略の不可欠な基地である。「韓国」労働者民衆は過酷な労働条件のもとで、日帝の強収奪にさらされている。戒厳令下にもかかわらず、ソウル大学学生三百人の死をも恐れぬ決起は、こうした「韓国」の危機の深まりを背景としている。朝鮮民主主義人民共和国に対する戦争挑発は同時に「韓国」における反革命弾圧の強化であり、南北分断固定化の策動以外の何ものでもない。日帝はまさにこの「韓国」への侵略反革命攻撃によつてのみ、アジアにおける反革命の盟主たりえるのだ。

プロレタリア国際主義を貫徹し、アジア人民との革命的連帯をかちとれ

ところで、こうした日帝の侵略反革命へのアジア人民の憤激は、田中の東南アジア歴訪が反日デモで迎えられたことで明白となった。昨年の天皇派米に対する反応もこれと同様であり、それは沖縄における皇太子に対する、ひめゆり白銀決起の闘いが沖縄人民の共通し

た心情を基盤として圧倒的に支持されたことと共通の事態である。

今日の天皇攻撃こそ、アジア人民への、日本人への公然たる宣戦布告である。これは、日本における革命勢力の圧殺、労働者階級人民への搾取と収奪の強化、民族排外主義への

組織的動員への攻撃を前提としている。したがって我々の任務はプロレタリア国際主義によつて武装され、帝国主義と民族・植民問題に関するレーニン主義の観点に立脚し、被抑圧民族人民―アジア人民との革命的連帯の闘争を組織することである。

そして、それは11・10天皇決戦の大爆発においてはおいては可能となるのだ。全ての同志諸君、闘うプロレタリアートの戦列を更に強化し、11・10首都にむかつて全国から総結集せよ、檜町公園から、天皇50年祭爆砕の炎をあげようではないか、共に闘わん！

・天皇制イデオロギー攻撃があるのはいうまでもない。

そしてさらに、日帝の部落差別攻撃は、最高裁―上告棄却攻撃によつて、石川氏獄死を狙う兇悪、極悪の差別反革命として激化しているのである。

したがって我々は、この様な中で今秋期の革命的激闘を、わが同盟―ORFとこれの領導する侵略反革命阻止全国政治共闘によつて担うべく、この革命的意志統一の打ち固めとして10/16ORF秋期総決起集会を開催した。

冒頭ORF書記局より、この間わが同盟の革命的党建設の苦闘大事業の大成、三全総路線のすべてをかけて物質化し、実践化する重要な局面にあることがまず提起され、秋期天皇決戦、狭山最高裁決戦に何としても同盟の総力を挙げて闘うとの高らかな宣言がなされた。

われわれは、昨年の9/30の革命的地平を真に受けつぎ、さらに第二次プロントの革命実践を継承し、その戦術思想を対自化し、総てを日本プロレタリアートの総蜂起へと、党建設を中軸としてつめ

11月天皇決戦の突破口切拓く

10・16革命戦線総決起集会圧倒的に成功

全ての闘う同志諸君！

前にひかえた十月十六日、我々は

11・10天皇決戦、10・31狭山最高裁決戦、そして10・21闘争を目 同志たちの熱く固い決意の中でか



革命戦線の隊列を更に強化して11.10へ！

くとくした。

まさに今秋期は、日帝の朝鮮侵略反革命戦争体制のより一層の激化と、この国内再編の決定的打ち固めとしての天皇制―天皇制イデオロギー攻撃、そしてこれに真向から対決するアジア人民、朝鮮人民、日本プロレタリアートの総力戦の激突の中に基調の一切が存在するのである。

すでに日本帝国主義は、昨年の9/30天皇派米以来、一貫して天皇を頂点とした破防法の大弾圧体制攻撃を強めており、又一方では労使協調、階級協調攻撃、排外主義的国民総動員体制のもとに、すべてをからめとらんとしているのである。(桜田発言等)、そして何よりもこれらの最大の総合環として11/10天皇式典による天皇制

ボルシェヴィキ創刊準備号 絶賛発売中！

遠方派グループに対する同盟からの革命的武器の批判

第一章 「党の発想とは何か」との関連におけるレーニン組織の歪曲と党―大政同路線の誤謬 6
第二章 「党の発想」における理論的基礎としての長崎叛乱論の根本的批判 13
第三章 長崎私党論の党―大衆主客対立図式とレーニン組織思想の主体的歪曲 22
第四章 正木論文における長崎私党論のエビゴネンとしての位相と珍発明 30
第五章 長崎前衛党論―正木論文のレーニン「なにをなすべきか」の一知半解性による同盟に対する嘲諷的批判の破綻

〈党―大政同路線〉の理論的基礎―長崎「叛乱論」政治的・共同性の構造の内的解体とその地平……山下 誠

第一章 科学とイデオロギーの分離―宇野方法論批判と第一次プロント革通主義の長崎的総括の破綻
第二章 長崎叛乱論の「近代」主義的位相と価値形態論―サトルの挫折と「世界の無」・永続運動の悲劇 47
第三章 サトル―長崎の相剋図式の超克とマルクス主義の世界観―唯物史観の根本的視座とはなにか 55
第四章 「叛乱論」の自己否定―政治的・共同性の構造の再度の破産
第五章 おわりに―「全総」―全総路線を更に前進させるために 64

申し込み先

東京都世田谷区千歳郵便局私書箱四号
振替 東京 〇―一九五七八三

改訂第2版 定価480円

游 撃

毎月一回五日発行！

年間(一二部)予約購読料二五〇〇円

定価一部一〇〇円

マルクス・レーニン主義に貫かれた革命的労働者学生、人民の直接的紐帯！ 帝国主義心臓部へ向けた総蜂起を組織する宣伝・煽動の指針！ 共産主義者同盟政治機関紙『游撃』を読もう！

あげねばならないし、三全総はその大道をくつきりと示したのである。

集会は、基調にひきつづき、次々と同志の革命的発言を受け、さらに教育社労組の秋山委員長の特

別アピールによって、秋期闘争への革命的決意をひしひしと確認していったのである。

そして最後に、共産中央委員会代表の挨拶によって集会は一挙に高まり、会場はわれんばかりの

万雷の拍手と熱気につつまれたのである。

起を！」「帝国主義の腐朽性に抗し、社会帝国主義、社会排外主義に反対して、プロレタリア世界革命の最前線へ！」の路線の下、ORFに結集し秋期決戦を闘おう！

こうして10/16 ORF総決起集会を獲得した我々は、「帝国主義心臓部にプロレタリアートの総蜂

治安弾圧網をひき裂き

10・21 全国政治共闘、天皇決戦前段 決起を貫徹

全国の闘う同志諸君！革命的労働者諸君！我が同盟とORFは全国の革命的、戦闘的同志、侵略反革命阻止全国政治共闘の革命的潮流を牽引し、10・21中央闘争を闘い抜いた。10・31狭山最高裁決戦と11・10天皇決戦という今秋期の最大にして最も重要な頂点を目前に控え、一切の犠牲を恐れず、革命的戦闘精神に裏打ちされた赤ヘルメットの巨大な隊列を登場せしめたのである。

すでに秋期闘争の決定的深まりの中で、ORFを先頭とした革命派の政治勢力は、まさに一点の曇りもなく、日帝の朝鮮侵略反革命粉砕、狭山最高裁決戦勝利、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃粉砕を前面に掲げ、日本プロレタリア

ートを唯一代表する革命的政治潮流としての拡大・強化を着実に獲得しつつある。しかもこれは4トロ、日向等の右翼日和見主義を決定的な窮地に追い込むものとして、又、中核派、解放派の中間主義諸派を圧倒する巨大なものとして獲得されようとしているのだ。

日本帝国主義は、今や絶望的な、朝鮮侵略反革命戦争体制を準備し、天皇制攻撃と、部落差別攻撃を激化させることを通じて延命策を求めようとしており、従って、これとの徹底した対決、革命的政治闘争の組織化、日本プロレタリアートの国際主義的任務の貫徹、これらをすべて内包し、収約して闘われていると言わねばならない。戦

後支配体制の崩壊以来、日帝の権力再編は激烈を極め、又、一方での民族差別、部落差別等の徹底した温存拡大、社会排外主義の政治勢力としての積極育成を通じて社会的支柱の強化を加え、反革命支配体制強化を徹底して作り上げようとしている。今秋期のブルジョア政治過程は、従ってこのことに全て集中されており、11・10天皇式典と狭山上告棄却策動はこの集中的表現に他ならない。

10・21闘争は、このための前哨戦として戦われたと共に、日本プロレタリアートの総力戦を準備する決定的地歩を築いたのだ。

集会は情勢の切迫を表現するよう機動隊・政治警察一万人の重包囲を突破して克ち取られた。秋期決戦への固い決意を表明する基調に続いて破防法と闘う会の同志が万雷の拍手の中、発言に立ち、

「起を！」「帝国主義の腐朽性に抗し、社会帝国主義、社会排外主義に反対して、プロレタリア世界革命の最前線へ！」の路線の下、ORFに結集し秋期決戦を闘おう！

権力再編の具体的進行の下、予防反革命、破防法社会化攻撃がこの秋期を巡って一層激化しており、警察的、官僚的、軍事的強化と階級協調攻撃に集中して現われる今日の支配体制と対決し、11・10決戦、10・31決戦に勝利しよう！との革命的アピールを明確に打ち込んだ。更に、革命的同志諸団体の発言を受け、最後に共産主義革命戦線(ORF)の代表者が発言に立つと会場は興奮のるつぽと化し、共産同三全総の革命的地平に正確に裏打ちされた革命的決意が表明され、今秋期の革命的政治情勢と帝国主義本国プロレタリアートたる日本人民の革命的任務、革命的政治方向がはつきりと提起され、更に、全国政治共闘の革命的任務、革命的政治方向が、はつきりと提起され、更に、全国政治共闘の革命的強化の方針、11・10、10・31決戦を誰よりも革命的に戦闘的に闘い抜くことの決意が述べられたのだ。ORFの発言を最後に集

会には直ちに首都中枢への進撃を開始し、真紅の革命派に恐れおののく機動隊を蹴散らし、一気に坂本町までのデモを貫徹したことはない。



10・21 前段決起を打ち抜く革命戦線

破防法と闘う会 ニュース

激化する権力の破防法社会化攻撃に抗し、日夜、闘い抜く全人民の尖鋭な武器！ 獄中、獄外貫く反弾圧戦線強化の武器！

連絡先 東京都練馬区西大泉809
泉荘2F3号

10・31決戦に全国から10万人結集 権力の大弾圧―不当逮捕攻撃を弾劾せよ 狭山最高裁決戦、全国規模で大爆発

解放同盟10・27・31狭山ハントを打ち抜く

10・31明治公園に結集した10万



天皇こそ、戦前、戦後一貫してと主力をあげてたちむかわなく差別分断支配の頂点として存在してはならない。
我々は、10・31へのぼりつめた差別、抑圧、排外主義の元凶でた狭山最高裁決戦の火柱を更に打たる。今日の狭山闘争の完全圧殺に固め、今こそ10・31石川アビーに向けた日帝の部落差別攻撃の激化こそ、それと不可分であり、しちとり、日帝―最高裁の闘門をこたがつて我々は、10月狭山決戦のじあけ、上告棄却策動を粉砕し、歴史的爆発の一切の成果を打ち固く口頭弁論、事実審理を行わせ、石川氏を奪還せねばならない。

神奈川狭山共闘(準)、県連のハント決起に連帯し、闘い抜く!

全国の同志、友人諸君ノ10・31寺尾差別判決徹底糾弾二周年 上告棄却策動粉砕中央総決起集会は、部落解放同盟主催の下、首都明治公園に闘う部落大衆を先頭に労働者人民一〇万人の大結集をもって勝ちとられた。

当日、10・27・31全国百数十ヶ所二千名にも及ぶ身命を投げうっての狭山ハント、そして10・31には、5・22全国10万人同盟休校に続き、盟休、狭山集会を勝ちとつた全国の部落大衆そして労働者人民は、早朝より続々と明治公園への大進撃をはかり、決定的段階を迎えた狭山最高裁決戦の大爆発をゆるぎないものとして刻みつけた。

この日我が革命戦線は、早朝からハント支持連に結集する友人とともに前段集会をかちとり、更に集会後の日比谷公園までデモンストレーションを終始戦闘的に打ち抜いた。この我々の闘いに驚がくした権力は、不当にも、七人の闘う部分を逮捕し去るという暴挙に出たのだ。だが革命戦線の隊伍は、かかる権力の極悪の攻撃にもひるむことなくこれを弾劾しぬき一層石川氏奪還の意志を打ち固めたのである。

今日、狭山をめぐる現局面はきわめて緊迫、切迫の度を深めている。昨年4・30を頂点としたベトナム―インドシナ人民の民族解放

―社会主義革命戦争の勝利的前進の反朴、反日、南北自主統一の闘いの圧倒的前進にあつて、帝国主義支配の根底的動揺、体制的危機の深まりをもつらせる日帝は、米帝とともに、米日「韓」反革命臨戦体制の飛躍的強化、わけても朝鮮侵略反革命へのめり込みを開始してきている。

昨年七月の皇太子、皇族の派沖、9・30天皇派米、前後する記者会見、今年3月皇太子の再派沖と相ついで政治過程の前面に天皇を登場させ、天皇制―天皇制イデオロギー攻撃の激化を背景としながら、被抑圧人民、被差別大衆そして労働者人民への差別、分断、排外主義をあおりたて、侵略反革命への国家的動員体制をつくりあげんとしている。とりわけ、11・10天皇在位50年祭めがけてそれが決定的に激化し、狭山をめぐる情勢もまたこれと不可分なものとして切迫してきているのである。

無実の部落民石川氏はもとより、全国の部落大衆、そして労働者人民による狭山闘争の巨大な全人民的爆発に恐怖をつのらせる日帝は、天皇の政治過程への登場、天皇制―天皇制イデオロギーの激化と相まつて、石川氏への獄死策動「上告棄却―寺尾差別判決護持」の強行突破を目論んできているのである。

天皇こそ、戦前、戦後一貫してと主力をあげてたちむかわなく差別分断支配の頂点として存在してはならない。
我々は、10・31へのぼりつめた差別、抑圧、排外主義の元凶でた狭山最高裁決戦の火柱を更に打たる。今日の狭山闘争の完全圧殺に固め、今こそ10・31石川アビーに向けた日帝の部落差別攻撃の激化こそ、それと不可分であり、しちとり、日帝―最高裁の闘門をこたがつて我々は、10月狭山決戦のじあけ、上告棄却策動を粉砕し、歴史的爆発の一切の成果を打ち固く口頭弁論、事実審理を行わせ、石川氏を奪還せねばならない。

全国の「遊撃」読者諸君!! 10/31狭山最高裁決戦に向け部落解放同盟のハント決起に断乎連帯し闘い抜いてる労働者、学生諸君!!

いまや狭山闘争は、上告棄却攻撃の激化の中で、文字通りの決戦段階を迎えている。すでに解放同盟が明らかにしているように、最高裁の証拠部分開示、最高裁に対する答弁書作成中止の動き、第二小法廷に対する果本判事等の補充とその言動、新矢調査官の調査報告書作成とその一部もしくは大部の最高裁への提出の可能性という文字通り日帝―最高裁の密室書面審理―上告棄却策動、石川一雄氏に対する獄死攻撃との真正面からのせめぎあいとして、今秋期とらわけ10/31狭山最高裁決戦があるのだ。

まさに決戦期を迎えたこの狭山闘争に対し、部落解放同盟は、5・22、23盟休闘争、八月全国網の目行動、「造花の判決」全国上映運動等決戦期に向けた日々々の闘いを積み上げ、その総力をもって、さる十月二十七日からの全国一斉ハント決起をもつて10/31狭山最高裁決戦中央大闘争に突入した。

これに先立って解放同盟神奈川県連は、その一翼を担い、十月二六日横浜市庁舎前においてハント

トに突入していった。
二六日、午後六時半、全県下から解放同盟と固く連帯し闘い抜いてきた労働者、市民、学生は、断乎ハント決起を支持し、共にハントに突入し防衛するという不退転の決意の下に総決起集会を五百名の結集で勝ちとつたのだ。

市庁舎前の解放同盟県連のテントを中心に築かれた支援団体のハント、防衛のテント、そしてそのまわりに解放同盟のハント突入宣言を大胆にかかげ、市庁舎前広場を「石川氏は無実だ!」「最高裁は上告を受理せよ!」「部落完全解放!」等の狭山最高裁決戦に向けてのスローガンでうめつきました。

我が神奈川狭山共闘(準)は、このハント決起を断乎支持し、支援しぬいた。このことの意義は極めて重大である。激化する上告棄却攻撃に抗し、石川氏奪還にむけ、一切を10/31決戦へしぼりこむことが要求されている今日、それに応えるかかる決起の一つ一つがまさに恒常的決戦体制を着々と打ち固めるものだからである。全ての同志諸君ノ 全国のあらゆる地区、職場から一切を10/31へノ!

10・20 狭山ハンスト支持連緊急集会 石川氏奪還に向け、明大労学狭闘 委をはじめ二百の労学が決起！

狭山最高裁決戦は、文字通り決戦期を迎えている。

かかる決定的な情勢の煮つまりの中、去る10月20日、狭山ハンスト支持連絡会議の緊急総決起集会を、戦闘的労学市民三〇〇名の結集の下、決戦勝利の固い決意と、一人一人がかみしめる中、戦闘的に勝ち取った。

狭山をめぐる現下の情勢は、極めて困難なものといわなければならない。日帝最高裁は、何としてもあの憎むべき寺尾差別判決を護持すべく、第二小法廷を、大塚・栗本等の差別反革命裁判官で固め、早期上告棄却を目論んでいる。ちなみに大塚は、「寺尾判決は立派」と言い放ち、栗本は「最高裁は下級審の判決をくつがえすべきではない」と公言した輩である。更に、8月30日、最高裁は、狭山弁護団が要求している一〇〇点の証拠開示のうち、とりわけ、「無害」と判断した四八点の開示を行った。（この中には部落への集中見込み捜査を示す一二〇人への部落青年の調査は一切含まれていない）と同時に、かねて最高検が公表する意志を示していた「答弁書」の

提出を拒否してきたのである。この二つの事実を、我々には切り離して考えることはできない。このことは証拠開示という「市民的」ポーズをとりつつ、事実上の前段審理としてある「答弁書」を拒否することにより、一層最悪の差別反革命攻撃を、日帝・最高裁がつ

のらせ、石川氏への獄死策動―早期上告「棄却」を何としてもなしきらんとしているのに他ならない。10/20集会は、狭山最高裁決戦を、死力を尽して何としても勝ち取り、更にそのことと一体のものとして、現下の日帝の天皇制―天

皇制イデオロギー攻撃を粉碎し、朝鮮侵略反革命を阻止せよ、との基調提起で始まり、参加各団体の固い決意表明が次々となされていた。とりわけ明大労学狭山闘争委（準）の代表からは、水谷部落差別発言糾弾と狭山決戦を一個のものとして更なる労学の団結で闘い抜くとの決意が明らかにされた。

この集会基調でも明らかにされているように、我々は今こそ、石川氏の機に、そして解放同盟の呼びかけに応えきり、更には、差別反革命―日共と全ゆる排外主義、日和見主義を粉碎し、天皇制―天皇制イデオロギー攻撃と対決しきる内実をもつて、最高裁決戦を勝ち取らなければならない。何より石川氏を奪還するため、飛躍的に部隊力を拡大させ、我々の真紅の隊列を登場させなくてはならない。

明大で狭山学習会、決戦期に向かう確信打ち固む

全国の同志諸君！ 去る10月15日、明大生協5・23実行委、農・政経学生会によって狭山最高裁決戦に向けた学習討論会が、狭山弁護団中山武敏氏、神奈川で狭山を闘う仲間、ハンスト支持連事務局を招いて、圧倒的にかちとられた。まず、5・23/25東京都連ハン

スト闘争への支持連常活動以降の明大労学の共同闘争の経過が報告され、今後この団結の強化をもつて最高裁決戦に臨む決意が明らかにされた。また、部落解放闘争が労働者階級の指導階級への飛躍のために全く不可欠の課題でありこの観点を血肉化せねばならない

ことが、職場における闘いの経験、臨時労働者問題、全金本山闘争支援の活動といった実践に引きつけて語られていった。神奈川の仲間からは、連日のビラ、ステッカー等の圧倒的情宣活動で職場を狭山闘争で席捲しているというリアルな闘いの前進が報告され、石川氏奪還の決意が述べられた。そしてハンスト支持連事務局からは、最高裁決戦への全力決起が訴えられた。続いて中山弁護士からは、今秋期にもなされんとしている、最高裁の早期上告棄却攻撃の切迫性が訴えられ、これを阻止するのは待機主義、敗北主義をはねのけた広範な人民の闘いのみであり、この組織化がなによりも急務であること、また8・30の最高裁の48点の部分的証拠開示は、警察の差別捜査を明らかにする証拠が開示されていないことをはじめとして、差別裁判の本質を隠蔽する極めて偽善的なものであることが具体的に暴露された。

参加者全員は、この学習討論会において決戦期における狭山差別裁判糾弾、石川氏奪還の確信を更に打ち固めた。この成果をもつて、更に、最高裁に石川氏を釈放させ、口答弁論、事実審理を行なわせ、最高検に全証拠を開示させる闘いを強固におし進めねばならない。この決意をみなぎらせ、上告棄却絶対阻止の固い意志を確認して集会は終了した。

11・2集会の全成果を天皇決戦へ 「新治安体制構築と闘う講演集会―天皇在位50年を糾弾する」に五百の結集

昨年7・17、9・30天皇派米以降の天皇・皇族の政治過程への登場は文字通り、帝国主義者の天皇制―天皇制イデオロギー攻撃として展開されており、11月10日の天皇在位50年記念式典はその集約環として存在する。我々はこうした天皇制―天皇制イデオロギー攻撃の反革命的意図を鮮明にさせ、これに対するプロレタリアートの総反撃を、総てを党建設と総蜂起へ結実されるプロレタリアートの死

闘として組織せねばならない。帝国主義国民人民に向って物質的にもイデオロギー的にも繰り出され続ける買収策動、帝国主義の危機と裏返しに画策される排外主義国民統合に対して、日本プロレタリアーがいかにか自らの歴史変革主体としての独自性を保持し、総蜂起―プロレタリアーに向けて進撃するの

捕に関して、「政治の混迷はここ一兩年続く、むしろ本命がつかまつた方がよい。その間、職場を中心とした労使関係を安定させ、警察、検察、裁判所及び官僚組織が健全であれば、この混迷期は乗り切れる。」と発言し、全国公安関係者同席上で稲葉法相は「当面の刑事弾圧の重点を、1.爆弾関係、2.内ゲバ、3.少数派労働運動におく」という内容の訓辞を行ない、帝国主義そのものの本性をむき出

この様な情勢の中で、従来の反弾圧戦線もその存在を根底から捉え返さねば一歩も前進し得ない岐路にたっている。「弾圧の攻勢の

前に、旧来の第二戦線の位相での救援活動ではやっていけない」という即自的反応の位相にとどまるのではなく、我々はこうした権力問題に答えるプロレタリアートの総蜂起へと向けた内実を己れのものとしつつ反弾圧戦線を強化せねばならない。民主主義を金科玉条とすることによって、現実に明らかになっている階級対立と階級支配の事実を曖昧にし、誰が誰を支配し抑圧しているのかという、すなわちブルジョアジーがプロレタリアートを支配し、抑圧している

という明解な事実を曖昧にし、反弾圧運動を単なる護憲主義へと転落せしめようとする傾向に対して民主主義的権利すら労働者階級の非和解的闘争によってしか獲得できないという階級対立の非和解性の現実に根拠をおき、その地平に立つて批判しきらねばならない。

したがって我々に問われているのは、階級攻防の一面面である弾圧をとり出して独自化することではなく、階級闘争の激化の中で、自らの階級的革命的実を明らかに

にする事であり、その実践的具体化として、弾圧と排外主義形成、破防法社会化攻撃に対して日本帝国主义の階級矛盾、階級対立を暴露し、プロレタリアートを総蜂起へと組織し抜く事である。また、完結、非転向の闘いについても、教条主義的なレベルにとどめるのではなく、党建設と階級形成戦の一体的貫徹という、我々の綱領的組織的内実を問うものとして捉え、権力のあらゆる転向強要攻撃を打ち返す、我々の党建設の真価が、何を防衛し、何からの転向を拒否

するのかわかることとして明らかにしつつ、非転向・完結の原則を階級的な問題として把え返さねばならないのだ。権力弾圧に対する憤激とその一切を党建設と、階級形成戦へと組織し抜き、プロレタリアートの権力問題として天皇制・天皇制イデオロギー攻撃を把え11月決戦を自からのものとしなければならぬ。11・2集会はその第一歩であった。

総ての同志諸君、労働者諸君、11・2集会の圧倒的成果を踏固め11・10天皇決戦を闘い抜けろ。

労働者運動の革命的飛躍を賭け、全金本山闘争の完全勝利へ前進せよ

全国各地で苦闘する労働者諸君、我々は「決して敗けることのない正念場を迎えた全国争議拠点」として、現在の中労委をめぐる攻防に突入した全金本山闘争を位置付け、現地仙台門前闘争と、全国展開（東管・ユーザー、銀行闘争）を連続的かつ系統的に組織し、中労委闘争と一体のものとして闘い抜いてきた。とりわけ、支部支援を結ぶ全金本山闘争の全成果をもって、革命派による労働者運動の未来をかけた闘いの構築として、云いかえればプロレタリアートの陣型構築が鋭く問われる

ものとして、全国支援戦線の再構築と共に担い切らんとしている。我々は、すべての闘う仲間、今こそ「一人の首切りも許さない」闘いから始まった本山闘争の全歴史の苦闘を共有し、完全勝利に向け、共に決起することを強く訴える。これこそ本山支部が堅持した「労働運動の原則」を更に「プロレタリアートの独自性」の観点から組織し、民同・既成戦線との格闘を「帝国主義段階における国際主義」と日見主義の不可避的分岐」として捉え、止揚していく前提でもある。

東京―東管、ユーザー、神奈川―銀行闘争の全面強化をもって資本を包囲せよ

中労委をめぐる「和解交渉」が、政治的解決としての争議收拾として「民同政治」の舞台へ引きずり込まれ、加えて戦後労働運動の歴史をひもとくまでもなく、中労委それ自身が「労使正常化」のための機関として存在していることを踏まえるなら、事態はより根底的に見据えなければならない。ただし、本山支部が語るように、「戦場で失ったものはテールでは取り戻せない」のだ。その意味でも組合分裂―組織破壊攻撃、右翼特防ガードマン導入とそれと一体となった権力・職制・二組幹部によ

る暴力的職場支配に一步もひるむことなく闘い抜き、ロックアウト攻撃に対しては、闘うこと―闘い続けることによるみ勝利という、本山闘争を全国争議拠点へと押しあげた労働者の階級的利益の断乎たる防衛と実力闘争路線の堅持を、更に打ち固めなければならない。

この観点は、第一に中労委をめぐる攻防にあたって本山支部が掲げ、団結の基軸として突き出した「五項目前提条件」(①原職復帰、②解雇撤回、③ロックアウト中の未払い賃金の支払い、④ガードマ

ン撤去、⑤組合活動への支配介入の禁止)として現在引き継がれている。これは、一昨年12月の地裁反動判決を受け、(そして地労委敗北―全員解雇という「予想」での生起した「別棟論争」に、事実上の結論をつけたものであり、本山支部と全国支援戦線の闘う団結の基軸を示したものである。我々は「別棟論争」に際して、これはすぐれて路線問題として論争されなければならないことを提起した。あれやこれやの「戦術」論議として(その端的な例としての「別棟就労か門前戦場化か」)これは本山闘争の意義とその未来に

望が、前段で粉砕されたのである。これこそ、73年2・9宮城地労委・職権斡旋を事実上拒否し、民同との格闘へ踏み込みつつ、既成戦線とは別個の、真に本山闘争に連帯し、闘う労働者を結集した全国支援戦線の構築に着手することをもって、攻勢的に切り拓いてきた本山闘争の革命的意義を継承するものである。

それ故、第二に、仙台現地と全国を貫く実力闘争を堅持し、本山闘争の苦闘を共有せんと決起した全国支援戦線の形成と、それと媒介される東管闘争・TBOをはじめとするユーザー闘争、更には富士銀行全国各支店への抗議糾弾闘争という全国的社会的に本山資本を包囲し、進撃する全国展開を、更に強化・拡大することである。かかる全国展開と、仙台現地闘争との一体的展開をもって中労委攻防を闘いとり、ここに全国支援戦線の再構築への第二の観点がある。

中労委闘争―五項目条件を堅持、防衛し全国支援戦線の再強化を戦取せよ

我々が「別棟論争」において「原則の堅持―別棟拒否が、支部労働者により苦闘を強いることにな

は其の苦闘を自らのものとして共有し、共に闘うこと抜きに、本山闘争の勝利はない」と敢えて提起した意味もまたここにある。すな

わち、「第2、第3の本山を」というスローガンがその、正しさにもかかわらず「支援―被支援」の構造を主体的に突破することがない限り、お題目化し、「別棟論争」の時に語られた「本山闘争の後退局面」なるものが他ならぬ支援戦線の後退であり停滞であることに全く無自覚になつてしまふ事も生み出しかねないのである。勿論、我々は「支部の苦闘を共有する」ことがどんなに困難なことであるのか、そして支援されているのは我々支援戦線の側ではないのかという闘いの具体性を、この間の闘いによって我々自身が突きつけられたことを否定しない。が、しかし、このことを全支援戦線―全国の闘う労働者が引き受けることをもつてしか「全国争議拠点」たる本山闘争の勝利はない。

第一と第二の観点をしっかりと踏まえるならば、10・16中労委闘争と24・25佐藤満男君追悼一周年仙台現地闘争で示した支部―支援の闘う団結を、更に強化し、争議収拾策動に走る民同―既成戦線に一步たりとも譲つてはならない。絶対に、いささかでも武装解除してはならない。中労委への「5項目」は「和解条件」として存在している。

更に、この本山闘争の正念場において決定的に問われていることは、支援―被支援という団結の有様を組織―実践的に超え、組合的団結そのものを対象化しうる支部―支援を貫く新たな団結に踏みこむことであり、とりわけ、「5項目堅持」として本山闘争の全歴史的苦闘を勝利へと転化しうる支部の闘う団結を形成してきた意義を、支部―支援の強固な結合として更に強く打ち固めることである。

党建設―階級形成戦の勝利かけ本山闘争を更に牽引せよ

同志諸君／全国の革命的労働者諸君／

今こそ、我々革命派労働者運動

の真価が問われており、本山闘争勝利の任務は支部のみならず、すべての闘う労働者の任務となつて

10・24―25故佐藤満男君一周忌追悼集会、現地門前闘争闘われる

「戦場で失つたものはテールでは取り返せない」―故佐藤満男君の遺志を受け継ぎ、全金本山闘争完全勝利の更なる決意を打ち固めよう！

全金本山闘争に注目する全国の闘う労働者仲間の皆さん！

「遊撃」読者諸君！

全金本山闘争は、10／16中労委和解打診第二回調査の席上、①原

職一括就労、②解雇撤回、③ロットアウト中未払賃金獲得、④ガードマン撤去、⑤組合活動への支配介入の禁止―5項目を本山支部が和解に臨むに当つての前提条件であるという立場をはつきりと主張することをもつて、支部の団結と決意を明らかにし、中労委を巡る攻防の端緒についた。この間、資本は東京営業所闘争中で「団交要

いる。「全国争議拠点」たる本山闘争は、労働者運動における階級対立の非和解性の頂点的攻防戦へと転化せしめねばならない。それ故我々は「共産主義者の労働者運動に対する組織と戦術」(ボル創刊号)問題として、本山闘争を位置付けなければならないとしてきたのだ。

すなわち、まず第一に、本山闘争は戦後の労働運動が、産別会議時代を経て民同労働運動にとつて代わられ、帝国主義派やあるいは排外主義労働運動として存在していることに対する闘争を通じた現実の批判である点を踏まえるならば、われわれは、この闘争の切り開いた地平を更に深化し、発展させることによって、「既成戦線との格闘」を更に押し進め、労働者内部の競争と分裂を、資本主義批判―帝国主義批判の深化として止揚し、共産主義と労働運動の結合を勝ちとらねばならないのだ。そして、第二には資本への「ゲリラ」

的反抗が、労働三法の枠へ、つまりは既成労組の枠へ収められていつた戦後日本の労働運動の歴史を主体的に踏まえるならば、こうした労働者の原初的反抗の中に存在する資本への経済的隷従に対する怒りを組織化し、それに根拠を置きつつ闘いを文字通りプロレタリアートの闘いとして深化せしめることが要請されているのであり、それは本山闘争に即しているならば、「争議の長期化」によつて強いられたとはいえ、「行動隊の編成」にとどまらず、「賃金プール―自己申告制」や「家族会」を自

らの闘いの中で創り出してきたように、24時間が闘いであるという地平を更に深化させることであることはいうまでもない。

闘う労働者諸君！われわれはこのような観点を踏まえ、本山闘争が全国の闘う労働者に突きつけている問題をわがものとして支部―支援をつらぬく闘争の一体的展開によつて、本山闘争の完全勝利とプロレタリアートの全国的結果とその闘いの内実の更なる飛躍を勝ちとり、共産主義と労働運動の結合をわが手で勝ちとらねばならない。

わが同盟が三全総でもって戦取した地平とは、「階級対立に根拠を置く党」と「党と階級との厳格な区別性」を統一的に把握し、攻勢的党建設と、階級形成戦の一体的展開を、△綱領―組織―戦術V総体にわたつて獲得しうる地平を三全総において戦取した。そして、仙台支局開設という全国党建設への確かな第一歩を踏み出すと共に全国的な党的布陣の建設と、それと即応した全国支援戦線の再構築の一体的展開を、必ず克ち取り、本山闘争勝利の地平を更に踏み固める決意である。すべての革命的労働者が、我が同盟と共産主義革命戦線に結合し、中労委―仙台現地―全国展開の本山闘争の勝利へ向けた陣型へ合流せよ！

本山資本を包囲し、追撃戦を展開せよ！

5項目堅持で、民同の争議収拾策動を粉碎せよ！

中労委攻防を全国支援戦線の再構築をもつて勝利せよ！

で10／24故佐藤満男君一周忌追悼集会・25現地門前闘争が獲ちとられた。

昨年10月25日「別棟論争」の渦中で、「生きている限り別棟には入らない」と自らの主体的立場を明らかにし、全金本山支部の団結強化の願いをこめて自らの命を断つた日から一年、支部組合員を先頭に、全国から結集した支援の労働者は、佐藤満男君の遺影の前に、深い悲しみを新たにすると同時に、本山資本に対する限らない憎悪を胸にたたみこみ、追悼集会を獲ち取った。

支部執行委員長の追悼の言葉、さらに書記長からの基調提起に続いて、満男君と闘いと行動を伴に

した各行動隊の代表が次々と立ち、生前をしのぶとともに、満男君は全金本山闘争の中に、支部員一人一人の心の中に、そして彼を知る全国の労働者の中に、いつまでも生き続けるであろうことを、さらに、「戦場で失ったものはテールではとり返せない」という文字通りの階級原則を貫き、六年間の闘いの中で一度たりとも下したことのない実力闘争路線を絶対

に曲げることなく、彼の死に対しては全金本山闘争の完全勝利をもつて報いることを全体の意志統一で強固に確認し、今後の闘いへの決意も新たに集会を貫徹した。翌25日、追悼集会の決意を更に打ち固めるべく門前闘争が展開された。宮城県警機動隊の露骨を極める争議介入、弾圧を粉砕し、門前に登場した、支部行動隊を先頭とした強固な隊列は、官憲の重包

囲をはねのけ、右翼暴力二組・職制・ガードマンの空虚なヤジを完膚なきまでに粉砕しつくり、断乎として門前にすわり込み、前日に続いて、全金本山闘争完全勝利まで闘い抜くまなみならぬ決意を支部―支援の仲間が表明し、くりかえされる資本の挑発をはねのけて集会を獲ち取った。全金本山支部は、この一年間様々な討議を経つつ、先にも述べた

五項目の前提条件を基軸とし、強固な団結を形成した。この間の闘いの不充分性を克服し、かかる支部の団結と、そして本山闘争の全国展開を基軸に更なる強化拡大をもつて、中労委を包囲し、年末一時金カンパ、物資販売を圧倒的に成功させ、更に12/19―20闘争の大爆発に向けあらゆる努力を傾けねばならない。

五項目の原則を堅持し、10・16中労委闘争の前進克ちとる

全国の同志諸君！とりわけ全金本山六年の闘いに注目し、その地平をわがものにせんと日々苦闘を続ける友人諸君！

今秋期に於ける闘いの正念場である10・15東管・ユーズー（TEO）、16中労委闘争は支部の仲間を中軸に、全国から支援を結集し、終始戦闘的に打ち抜かれた。

中労委闘争を翌日に控えた10月15日、霞ヶ関ビルTEO本社前に登場した支部・支援は出勤途中の労働者にピラミッド情宣を貫徹し、TEO交渉へ臨んだ。あいまかわらずその場限りの言いがたで責任を回避せんとするTEO担当者に対し、支部―支援は丸となつて追求の手をゆるめず、管材部長の次回交渉への出席を強力にうな

がすことによつて、ユーズー闘争の更なる推進を力強く宣言した。TEO交渉に打ち続き、東管前に進撃した部隊は、百名を越す中央署―制服・私服の暴力的介入を、坂本町公園前で粉砕し、集会を渦巻く熱気のうちに貫徹したのである。

そして16日、前夜からの激しい雨をものともせず結集した支援を迎え、支部の戦闘的労働者を中心に中労委前集会を克ちとり、更に支部代表が委員会席上で主張を続ける緊迫した空気の中で待機集会を断乎として貫徹した。委員会席上、支部代表が写真等の証拠をもつて暴力労政の実態を暴露するや、委員は「支部は暴力労政というが資本も逆に同じことを言っている」

「どちらの言い分が正しいにしろ暴力行為があることは事実であり、このことの解決が交渉の前提である」「支部―資本双方から意見書を出してもらい解決する」云々と、この間の争議の経緯と事の本質を捨象した、白を黒と言いくるめんばかりの「調停」主義的対応に出たのである。これに対し、支部代表は「活動の規制は許さない」「資本は地労委命令等の第三者機関の決定を一貫して踏みにじっており、資本が地労委命令を履行することがなければ解決の為の何の保障も存在しない」という原則的主張を毅然として表明したのである。

全国の同志諸君！全金本山支部の闘いが切り拓いた今日の地平を真正面から受けとめ、一切を本山闘争の発展へと注ぎこもうではないか。

ボルシェヴィキ創刊号 絶賛発売中！

政治報告

マルクス・レーニン主義の革命党建設へ更に前進せよ！
「遠方派」の放逐と我々の到達段階 共産主義者同盟中央委員会

第一部 綱領思想と資本主義・帝国主義批判
資本主義批判・帝国主義批判と唯物史観 山下 誠
国際共産主義運動総括（I） 沖田友士

第二部 過渡期世界の階級闘争とプロレタリアート
日本資本主義における天皇制権力と 山下 誠
プロレタリアートの権力問題
過渡期世界の革命戦争と軍閥―武装問題の基本的視座 沖田友士
（一条論文）大衆的武装闘争の戦略問題―の根底的止揚
共産主義者の労働者運動に対する組織と戦術 郷原 峻

第三部 侵略反革命、差別分断支配に抗するプロレタリアートの諸任務―綱領の実践的分野における諸問題 I
共産主義運動の大道を進み沖繩解放闘争の
巨大な地歩を獲得せよ
狭山七告審闘争に完全勝利し、共産主義運動と
部落解放闘争の革命的結合を勝ちとれ
共産主義運動と結合した女性解放運動の確立と
深化発展にむけて
第四部 侵略反革命、権力再編に抗するプロレタリアートの諸任務―綱領の実践的分野における諸問題 II
破防法体制粉砕に向け反弾圧戦線の更なる強化を 林 駿介
プロレタリア陣型としてかちとれ
生協戦線における階級闘争の原則とその陣型構築 桜田 潤
の論理と実践―地域住民運動と生協運動の結合
学生戦線に党の陣型を強固に打ち固めよ！
大政同論の止揚と反帝戦線主義の学生戦線における克服 共産主義革命戦線
学生委員会

定価 一五〇〇円
A5判 四〇八頁

申し込み先 遊撃社

東京都世田谷区千歳郵便局私書箱第四号
振替 東京〇―一九五七三

社会帝国主義との対決を強め、総蜂起に 向かう共産主義運動の大道を突き進め！ その2

国際共産主義運動を総括するマルクス レーニン主義の実践的立場とは何か

毛沢東思想の革命的意義を明らかにし、スターリン 主義の根本的解体、止揚へ突き進め！

マルクス・レーニン主義の復権過程における毛沢東思想

我々は、一九六三年以降の「中ソ論争」にはじまる中国共産党のソ連批判の根拠を、毛沢東思想の出発点たる、中国革命そのものに求めねばならない。社会主義建設上の分岐は、すでに、中国における反帝民族解放闘争の指針をめぐって内在化されていたのであり、その実践は、自覚的であったとは言えないにせよ、既に概略記しておいた如きスター・ブハ綱領の限界を、そこから出発しながら内在的に突破するものであった。

「それ（第一次帝国主義大戦とロシア十月革命—引用者—）以後もう一つの世界革命、すなわちプロレタリア階級の社会主義世界革命がはじまった。この革命は、資本主義国のプロレタリア階級を主力軍とし、植民地、半植民地の被抑圧民族を同盟軍としている。被抑圧民族のなかで革命に参加している階級、政党、個人が……帝国主義に反対するかぎり、その革命はプロレタリア社会主義革命の一部となり、かれらはプロレタリア社会主義世界革命の同盟軍となる。」

「このような植民地、半植民地の革命の第一段階、すなわち最初のあゆみは、その社会的性格からいうと、基本的には依然としてブルジョア民主主義的なものであり、資本主義の発展のために道をききよめることがその客観的要求である。だが、このような革命は、もはやブルジョアジーに指導された資本主義社会とブルジョア独裁の旧い型の国家を樹立することを目的とする旧い型の革命ではなくて、プロレタリアートに指導された、第一段階では新民主主義の社会と革命的諸階級の連合独裁の国家を樹立することを目的とする新しい型の革命である。したがって、このような革命はまた、まさしく社会主義の発展のためにいつそうひろびろとした道をききよめるものである。」（「新民主主義論」）

ここには、二つの要素が未分化に内在している。ひとつは、スター・ブハ綱領を受けつ

だ戦略主義的な「同盟軍規定」であり、他のひとつは、反帝民族解放闘争をブル民革命として見るのではなく、「新民主主義革命」としてマルクス・レーニン主義の戦術思想を、実質的に継承する観点である。毛沢東思想は、中国革命の中で、この後者による前者の克服の過程において発展してきた。

「プロレタリアートの指導のもとにある新民主主義共和国の国営経済は、社会主義的性質のものであり、全国民経済を指導する力である。だがこの共和国は、けっしてその他の資本主義的私有財産を没収するものではなく、『国民の生活を左右しえない』ような資本主義的生産の発展を禁止するものでもない。それは、中国経済がまだひじょうに立ちおくれているからである。この共和国は、土地を没収し、それを土地のない農民に分配し……農村における封建的関係を一掃し、土地を私有にうつすであろう。農村における富農経済も、その存在をゆるされる。……この段階では、一般的にはまだ社会主義的農業を建設することはできない。だが『土地を農民へ』を基礎として発展するさまざまな協同組合経済は、社会主義的要素を持つであろう。」（「新民主主義論」）

ここでは、植民地従属国における反帝民族解放闘争を、プロレタリアートの指導の下にいかにか社会主義へと導いていくべきかが、その世界革命上の位置については不鮮明ではあれ、レーニンの問題意識を継承するように適確に指示されている。その意義は、スター・ブハ綱領そのものと比較すれば一層鮮明になるだろう。「世界革命の過程は、帝国主義諸国家の労働者をプロレタリア独裁を目指す闘いに追い込み、同時にまた幾億の植民地労働者・農民を外国帝国主義との闘争に奮起させる。経済力のたえず増加している社会主義ソヴェト共和国の形態において、ひとたび社会主義の中心が存在するようになれば、帝国主義を

離脱した植民地は、世界社会主義の工業的諸中心地と経済的にいつそう近づき、そして漸次これらと連合する。このようにして社会主義建設の道に引き入れられ、そして資本主義が支配的制度である発展諸段階を迂回して、それらは急速な経済的および文化的進歩を遂げることができる。」ここからも明らかのように、スター・ブハ綱領は、反帝民族解放闘争の国際階級闘争における位置を、先進資本主義国（帝国主義本國）プロレタリアートの「同盟軍」としてしか規定できなかったばかりか、更に、社会主義建設についても、「工業的諸中心地」との経済的接近のみを一面的に語ることにより、農民の社会主義的改造等といった実践的課題に答えず、実際上ではこれを彼岸化してしまうものであった。こうした観点では、反帝民族解放闘争を指導するプロレタリアートの針路は何ひとつ明らかにすることはできず、ブルジョア民族主義への解体と屈服が必然化されていたのである。これに対する単純反発から、反スター・トロツキズムは一段階社会主義革命を主張するのだが、これは農民の存在を度外視する点で一層空論的である。また中核派などに示されるように、「帝国主義段階においては、農民問題を資本主義的に解決することはできない」という宇宙野経済学の指摘（その傾向の指摘自体は誤りではないが、これはまだ実践の理論ではない）をもとにこれを正当化せんとする主張も存在するが、社会主義建設の内実を抜かしているため、結局は、反帝戦略主義でしかない。

（「遊撃」特別号P7参照）

毛沢東は、こうした反帝戦略主義を、とりわけ、スター・ブハ綱領のそれを、そこから出発しながらも、反帝民族解放闘争と、社会主義建設の闘いを、プロレタリアートの指導性の貫徹のもとに一連統のものとして展望することによって突破したのであった。すなわち帝国主義の支配と、封建的支配とによって苦

とりわけ、農民の社会主義的組織化にあつて「農村で全人民所有制を獲得するまゝは、農民はやはり農民なのであり、かれらは社会主義の道で一定の二面性をもつ。われわれは農民を一步一步導いて、小集団所有制や大きな集団所有制・全人民的所有制にむかわねばならない。この過程は一挙に完成させることはできない。社会主義社会における労働に應ずる分配・商品生産・価値法則はまさか永久不滅の法則ではあるまい。」と語り、

「二つの移行についてスターリンがその方法、道すじをさぐりあてなかつたことはスターリンにとってつらいことであつた。……われわ

れの生産で調整作用するのは計画であり、計画的な大躍進・政治優先である。スターリンは生産関係を語るだけで、上部構造を語らず、上部構造の経済的基礎に対する関係を語らない。」と語っている点は決定的である。毛沢東は、農業集団化にあたって、農民の小商品生産者という側面と、小生産者（＝小経営）という側面とを区別してとらえ、後者をプロレタリアートと同盟する農民の革命的側面としておさえ、これに依拠して小経営の大経営への転化を展望したのであり、集団化はこの意味で階級闘争として提起されたのである。これは、農民の持つ、「利己主義や偏狭さ」（マルクス「ド・イデ」）の傾向に対する社会主義的改造の闘いであると同時に、大経営への転化を展望することにより、都市―農村、工業―農業の対立を止揚する具体的方策ともなった。

従って「政治優先」であったのだ。我々はこのことを見抜くことによって毛沢東思想の真髓に学ばねばならない。

55年の毛沢東の呼びかけ以来、農業の集団化が急激に進められ、同時に手工業の協同化、資本主義的工商業の公私合営化も進められ、この一連の所有制の変革（生産手段の私的所有の廃止―全人民的所有と集団所有の「二所有制」の確立）は、56年末にはほぼ完了した。こうした社会主義建設上の前進の中で、「二つの路線」の対立が徐々に明らかとなるのである。「わが国では、社会主義的改造が、所有制の面では基本的になしとげられ、革命の時期における大規模の、あらしのような大衆的階級闘争は基本的に終わりをつけたが、しかし、くつがえされた地主・買弁階級の残存分子はまだ存在しており、ブルジョア階級はまだ存在しており、小ブルジョア階級はやつと改造されはじめたばかりである。階級闘争はまだ終わっていない。プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのイデオロ

我々は、だが同時にその限界をも見ておかねばならない。この作業をマルクス・レーニ

ン主義（現代的復権という観点から進めることとは、教条主義を排し、真に毛沢東思想から学ぶ為には全く不可欠である。毛沢東思想の限界は、直接的にはその国際路線において端的に示される。毛沢東はコミンテルンの解散（一九四三年）に際して、それを支持する立場から次のようにその理由を語っている。

「第一に、各国内部の事情及び各国間の情況が、以前とくらべ、ずっと複雑になり、その変化もまたずっとはやくなつたからだ。統一的な國際組織は、このようにひじよに複雑なそして急速な変化に対処できない。……第二にフアシスト強盜どもは、フアシズム集団と反フアシズム集団に属する各民族のあいだに深いミゾをつくつて画然と区分けした。反フアシズムの国家のなかには、社会主義、資本主義、植民地、半植民地といういろいろの類型の国家があり、フアシズム国家とその隷属国のなかにも大きな相違がある。第三に各国共產党の指導幹部が成長を遂げ、すでに政治的に成熟したからだ。」（「コシンテルン解散問題についての報告」）

毛沢東がこうのように、コミンテルンの解散に賛成したことは、中国革命自体が一面ではその指導の誤まりとの不断の闘いの過程であったこと（27年の国民革命の失版―李立三コース、30年代前半の江西ソヴェトの放棄―第一次王明路線、30年代後半の抗日統一戦線―第二次王明路線等の「モスクワ派」との闘い）

を考へるならば確かに根拠のあることである。だが、毛沢東はこうしたコミンテルン指導部―スターリンの誤まりに對する根本的批判を行なうのではなく、各国の―従つて中国の特殊性を對置したにとどまつたのであつた。そのため、中国革命の現実的前進の限りにおいては、反帝民族解放闘争の意義、社會主義建設の道をめぐつて示されているように、スターリン主義との實質的分岐は進められたが、スタ・ブハ綱領における戰略主義と連邦分權主義、すなわち、スターリン主義そのものとの對決とその克服をマルクス・レーニン主義の現代復權として國際共產主義運動を首尾一貫して總括する見地から行なうことは、依然としてあいまい化されているのであり、それゆゑに、我々はこれをいまだスターリン主義の克服と、マルクス・レーニン主義の復權の過程に位置していると見なければならぬのである。

こうした中国共産党と毛沢東思想の孕む矛盾は、「中ソ対立」の深化の中でより鋭いものとなつてきた。60年の公開論争に至る「中ソ対立」は、すでに50年代末期には避けがたいものとなつていた。この根拠は、主に中国の社会主義建設における「二つの路線」（資本主義か社会主義か）の対立、そしてこれと関連した中国におけるソ連式の工業化路線をめぐる対立が存在していた。中国社会主義建設をめぐる対立と闘争は56〜58年ごろ、すなわち第一次五ヶ年計画（53〜57年）末期から「大躍進」（58年）の時期にかけて顕在

こうしたプロ独下の、とりわけ所有制変革——所有制確立以後の階級闘争の存続に関する理論が、スターリンの階級闘争消滅論や、それに論をかけたフルシチョフ以降のソ連——「共産党」と決定的に対立するのは明白であろう。従つて、階級闘争消滅論の上に立つたソ連式の、農民の社会主義的改造抜きでその収奪による工業化路線を支持した党内部の修正主義分子や、ソ連との闘争と分岐とは全く必然的であつた。毛沢東は、58年大躍進——人民公社（行政単位と経済単位との統一）建設をすすめると同時にソ連との分岐を深めていった。この分岐は、60年には、公然たる論戦に転化して、その結果、ソ連の对中国技術援助の停止、ソ連技師の引きあげという決定的対立へと至つたのである。このソ連に対する中国共産党の立場は、全く正当なものである。修正主義批判、社帝批判と、プロレタリア文化大革命に至る社会主義継続革命の歴史的经验から、我々は、多くを学ばねばならないが、と同時に、このソ連批判のありようそのもののものに、その限界もまた孕まれている事を明らかにせねばならない。すなわち本章冒頭述べておいた、スターリン主義への根本的批判の欠如がそれである。

「……ソ連共産党内にひそんでいた資本主義の道を歩む実権派フルシチョフは、スターリンが逝去したあと、奇襲攻撃のやり方でスターリンを悪どく誹謗する「秘密報告」をもち出し、さまざまな陰険狡猾な手段をつかって、ソ連の党と国家の大権をのつとめた。これはプロレタリア階級独裁をブルジョア階級独裁に変える反革命クーデターであり、社会主義をくつがえし資本主義を復活させる反革命クーデターであった。」（「レーニン主義なのかそれとも社会帝国主義なのか？」）このように、ソ連の党の社会帝国主義への変質転化を、その歴史的階級的背景の解明抜きに「クーデター」という突発事件としてしか、説明できず、国際共産主義運動の総括という主体的立場を首尾一貫して貫くことができないところに、中国共産党のソ連批判の不徹底さが、集約的に示されている。

我々が本論文でくり返し主張してきたように、ソ連の発生を、第三インターにおけるレーニン主義の未貫徹として総括せねばならないこと、従ってその批判は、マルクス・レーニン主義の現代的復権という立場に立つてのみ徹底したものとなる。だが中国共産党は、ソ連社会における資本家階級が存在や労働者への抑圧、東欧、「第三世界」に対する植民地主義的収奪の諸々の事実を暴露することはできて（もちろんこれは必要であり正当である）、その歴史的根拠を、スターリンに、とりわけ、その戦略主義の体系化としてのスタ・ブハ綱領に至って切開することができない。そのため、ソ連の形成と、そしてそこにおける党、国家、およびそれらの経済的基礎を正しく捉えられず、従って現在のソ連における党、国家の政治的性格と、それらの経済的基礎の関係を正しく捉えられず、単純に帝国主義にアナロジーしてしまい、その基礎を「国家独占資本主義」としてしまふ論理を生み出すのだ。「資本帝国主義であれ、社会帝国主義であれ、その基本的な経済的特徴は、それらの主要な経済的土台がともに独占資本主義であることにある。」（「政治経済学の基礎 資本主義篇」）

プロレタリアートがソ連の変質を対自化する際に、その革命的实践において要求する理論は二つの内実を持たねばならない。第一は、ソ連が社会帝国主義に転化しており、これがプロレタリアートへの反革命敵対を強めていることを暴露することであり、第二は、なぜソ連は社会に転化したのかを、国際共産主義運動を総括する立場から明らかにすることである。とりわけ第二の点は革命党にとって決定的に重大であり、この点の根本的切開を、第三インターにおけるレーニン主義の未貫徹として総括し、マルクス・レーニン主義の現代的復権を戦取することによって、第一の社会帝国主義批判と一体的に貫徹するというのが我々の観点である。だが、「政治経済学の基礎知識」に示された見解は、第一の

点には答えても、第二の点には答えない。そのため第一の社会帝国主義に対する暴露も、あれこれか式の極めて悟性的振り分けの色彩が強く、共産主義運動の主体的推進という立場よりは、反帝戦略主義の傾向が強いものとなってしまう。とはいえずその後で「しかし、資本帝国主義国では、独占資本主義経済には二つの形態、すなわち私的独占資本主義と国家独占資本主義が存在しているが、社会帝国主義国では、独占資本主義はすべて国家独占資本主義の形態で出現し、この国家独占資本主義が、社会帝国主義の主要な経済的土台である。社会帝国主義とのこのような差異は、独占資本がことなつた歴史的條件のもとで生成したことによるものである。」「……社会帝国主義国の独占資本主義は、資本主義の道を歩む実権派が社会主義国の党と政府の権力をうばい取つたのち、資本主義を復活させる過程で、社会主義経済を変質させた結果生まれてきたものである。」というように一応の説明（第二点の内容に相当する）がなされているが、実権派や、あるいは修正主義の発生の根拠は明らかではないため、十分に納得できるものではない。

従ってこれでは、国際共産主義運動の総括はおろか、ソ連社会の独自の性格も明らかにすることはできないのである。（断つておくが、我々がここで提起しているソ連における「独占」の有無を殊更に議論することではないのだ。）プロ革派の主張する「帝国主義の最終の小段階としての国家官僚独占資本主義」説の誤まりも、中国共産党のこの点におけるあいまいさに一つの根拠があるのである。またこうした帝国主義への単純なアナロジーを規定している、スタ・ブハ綱領における戦略主義の未克服は、反霸権や、反帝反社会のあらたな戦略主義を生み出し、今日のいわゆる中国派の諸君の間にその解釈をめぐる様々な混乱をもたらしているのである。

すでに明らかのように、中国共産党は反帝民族解放闘争と社会主義建設の実践の中からスターリン主義の克服へと向かう過程に他ならず、先にあげた「新民主主義論」の引用で言えば、後者による前者の克服の過程である。そしてソ連批判、プロレタリア文化大革命はなによりその証左であった。この過程は、マルクス・レーニン主義の実践を堅持する限り不可逆であり、必ず前者の否定、スターリン主義の止揚へと至らねばならない。その時こそソ連批判も、中国における実権派、修正主義批判の歴史的意味にうらうちされるのである。このことが明らかにされない以上、中国共産党の動揺は不可避であり、従って我々にとって中国共産党はこの点で世界革命の過程で止揚すべき対象とされねばならないのである。

以上ここまで、中国革命に至る国際共産主義運動の歴史的経験を対自化することの中で、我々の社会帝国主義批判の骨格を今日の実践的要求

との関係で明らかにしてきたが、更にこの考察は、一方においては社会主義建設の核心問題、もう一方においては今日の諸政治勢力への厳密な評価として、それぞれ深化され、具体化されねばならない。この課題のうち、後者については最終章でとりあげることにして、次章では、社会主義建設上の理論的核心の深化を作業は、社会主義建設の歴史的諸教訓の今日的対自化を通して、「党と階級との厳格な区別性」という我々の基本的理解を更にうらづけると同時に、綱領の原則的部分に関する我々の認識を更に発展させるものとなるであろう。これらの問題の要は、我々が本論文においても再三語ってきた、「プロレタリアートの独裁——全面的指導の下での小経営の大経営への転化」というテーゼにある。

特別号訂正

*P1下段7-8 「階級形成主義」を「階級形成党派の内的弱点として総括し、この克服に全力を注いできたが、このことが一面的に教条化されてしまふとき、党・階級二元論、階級形成主義」に

*P2上段25 「クーツネン」を「クーシネン」に

*P6中段43-44 「社会主義の任務を広汎に包摂する社会主義革命」を「社会主義革命への強行的転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命」に

*P14中段10 「『小農民を基礎とした』を「『小農民のな国』でいかに実現するか? また小農民を基礎とした」に、それぞれ訂正します。